

知的障害のある高校生に対する身だしなみ行動の形成①

—ハンカチ、ティッシュの携帯—

Teaching personal grooming skills for a high school student with intellectual disabilities

○ 鳶野美紗 佐藤喜和 石川健介

(富山県立となみ総合支援学校) (金沢工業大学心理科学研究科)

Misa TOBINO Yoshikazu SATO Kensuke ISHIKAWA

(Tonami School for Special Needs Education, Toyama) (Graduate Program in Clinical Psychology,
Kanazawa Institute of Technology)

Keywords: 身だしなみ行動 知的障害 ADHD

1 問題と目的

本研究では、身辺自立に関わる一連の行動を遂行することはできるが、その行為が必要な場面で生起する頻度が著しく低い知的障害の男子生徒に対して、身だしなみ行動を適切なタイミングで行うための有効な支援を検討した。

2 方法

対象者: 高校2年の男子生徒A (以下、A生と記す) で、知的障害、ADHDの診断を受けていた。

WISC-IIIの結果、全検査IQ62、言語理解62、知覚統合72、注意記憶103、処理速度52であった。手洗い、歯磨き、洗顔などの身だしなみ行動を、視覚手がかりや、支援者からの声かけの支援があっても実行できないことが頻繁にある。

標的行動: 登校して着替えた後、ハンカチ、ティッシュを携帯する。

期間・場面: 1か月間(20××年5月～6月)登校～朝の準備の時間10分間で毎日実施した。

手続き: <BL>朝の着替えの後にハンカチ、ティッシュを携帯するよう声かけした。<介入1>A生に対し、教師(第一著者)がチェックリストを用いることを提案し、登校時に必ず目に入るようにA生の机の上にチェックリストの用紙とペンを置いた。しかし、自らチェックリストを用いることは無く、チェックリストの上にかばんを置いてしまうほどだった。<介入2>A生と相談し、本人も実行できそうだと発言もあったカードを机の上に貼付する方法を採用した。大きさや色、貼る位置や使い方についても相談し、行動の流れを確認した。

・カードは6×8cmの大きさで、ハンカチ、ティッシュと印字し、A生が気付きやすい黄色で着色する。

・A生が着替えに行く前にカードの上にハンカチ、ティッシュを置き、着替えから帰ってきたらポケットにハンカチ、ティッシュを入れる。

ハンカチ、ティッシュは家から持ってくるのが望ましいが、家から持って来ていない場合は、教室のロッカーにある予備の物を使用してよいことにした。

ハンカチ、ティッシュをポケットに入れたときに「やればできる男だね!」などと称賛した。また手洗いや、鼻かみのときに実際に使用したときにも称賛し、ハンカチ、ティッシュを持ってきて

いることよさを理解できる機会を積んだ。

3 結果と考察

BL期、ハンカチ、ティッシュを持ってくることは無かった。介入1ではチェックする方法を用いたが、有効な支援とならなかった。介入2の結果、生徒Aは登校すると、カードの上にハンカチ、ティッシュを置いてから着替えに行き、着替えから戻ってくると、ポケットに入れる様子が連日安定して見られた。行動の最中に他の生徒から話しかけられて動きが一時遮られたときも、その後最後まで行動を完遂できたということがあった。加えて、ハンカチ、ティッシュを家から持ってくるという行動も同時に増えていった。このころから手洗いの回数も増え、トイレの後や掃除の後の手洗いは確認できるだけでもほぼ毎回達成できており、手を洗った後はハンカチで手を拭いている。

このことから、A生には本人ができそうだと思う手段を支援者と一緒に考えることと、手がかりの色や配置が、有効な支援の構成要素であったと考えられる。

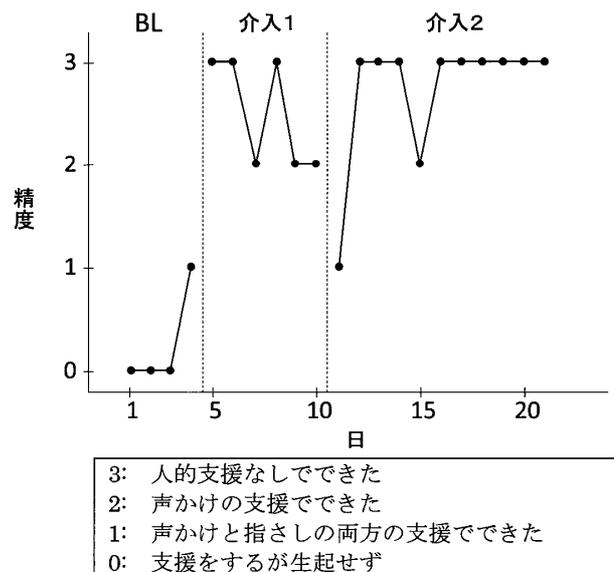


図1 標的行動の精度の変化